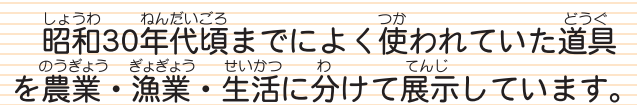


かい みんな てんじしつ
2階 民ぞく 展示室



◆開館時間 かい かん じ かん 午前9時ごぜん～午後4時30分じ ごご じ ぶん

ねんまつねんし
年末年始 (12 / 29 ~ 1 / 3)

**あんないず
ご案内図**



神栖市
歷史民俗資料館



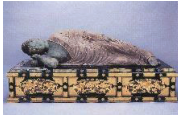
〒314-0144
茨城県神栖市大野原4丁目8-5
TEL 0299-90-1234
FAX 0299-93-4055
mail:rekishi@city.kamisu.ibaraki.jp

市の移りがわり(年表)

じだい 時代	ねんだい 年代	おも 主 な で き ご と
じょうもん 縄 文		おくの やかい ・奥野谷貝づかがつくられる。
こ 古 ふ ん	300 500	が たかはま しゅうらく ・このころ賀、高浜などに集落がつくられる。 につかわ たかはま こ ・このころ日川、高浜などに古ふんがつくられる。
な ら 奈 良	715	ひたちのくにに ふ ど き か ・このころ『常陸国風土記』が書かれる。
へい あん 平 安	807 1162 1180	いきす じんじゃ にっかわ いきす うつ ・息栖神社が日川から息栖へ移る。 かすみがうら とねがわ かいふ ・このころ霞ヶ浦、利根川などに海夫があらわれる。 つつじょうみょう う じ ばし たたか かつ ・筒井浄妙が宇治橋の戦いで活やくする。
むろ まち 室 町	1374	か とりじんぐう かい ふちゅうもん し ・香取神宮が海夫注文をつくる。市には13 つ みなと の津(港)があったことがわかる。
え ど 江 戸	1631 1800	ばくふ げんち おこな むら ・幕府によって検地が行われ、19の村ができる。 とうごくさんじゃ りゅうこう しも とね ・このころ東国三社もうでが流行し、下利根 ちほう おお ひとびと おとず 地方に多くのひと々が訪れる。
めい じ 明 治	1869 1871 1875 1877 1889	いぎりぼり こうじ ・居切堀の工事がはじまる。 むら みやざくけん にいはりけん ・19の村は宮谷県から新治県となる。 こ いばらきけん ・その後、茨城県になる。 きせん つううんまる ちょうし とうきょうかん むす ・じょう気船「通運丸」が銚子―東京間を結ぶ。 しせいちょうそんせい かの むら なかじまむら とうしも ・市制町村制により、軽野村、中島村、東下 むら や た べむら わかまつむら 村、矢田部村、若松村になる。
たいしやう 大 正	1922 1924 1925	かしまぶん か むら ・鹿島文化村がつくられる。 かしま りそうきやう ・鹿島理想郷がつくられる。 なかじまむら いきす むら ・中島村が息栖村となる。

市の文化財

市には、^し国、^{くに}県、^{けん}市から^し重要な文化財として^{じゅうよう}選ばれたものが^{ぶん か ざい}29あります。^{えら}

国	やまもと けしゅうたく おくの やち く 山本家住宅 (奥野谷地区) やまもと けしゅうたく おくの やち く 山本家は江戸時代の中ごろにたてられたと思われ、漁船やあみをもっていた漁家で名主をつとめたこともあります。 		ぶつぎょう かん 仏教に関するもの ぶつぎょう たてもの ● 仏像をまつるための建物 釈迦堂 かみ きぬ ぶつぎょう え ● 紙や絹にかかれた仏教の絵 りょうかいまん たら てん しゃ か ね はん が 両界曼荼羅 (2点) 釈迦涅槃画 かみ いし きょう ● 紙や石にかかれたお経 だいほんにゃ は ら あつ た きょう てん しゃきょういし 大般若波羅密多經 (2点) 写經石
	しゃ か ね はんぞう はさきち く 釈迦涅槃像 (波崎地区) しゃ か きま な すがた お釈迦様が亡くなったときの姿をあらわしたものです。鎌倉時代に作られたと思われま。 		せきとう き ぶつぎょう ● 石塔や木の仏像 ほうきょうしんとう 宝篋印塔 じ ぶ ざつりつぞう やく し さんぞんぞう など他6点 地藏菩薩立像 薬師三尊像
県	だいにちよりいざぞう はさきち く 大日如来座像 (波崎地区) い もの ほとけさま すべての生き物のもととなる仏様です。室町時代の作といわれています。 	市	ゆうめい ぼう はか ● 有名なお坊さんの墓 じょうまうづか 浄妙塚
	は さき おお はさきち く 波崎の大タブ (波崎地区) しゅうい やく たか やく じゅれい やく 周囲約8m、高さ約15m、樹齢約1,000年余りを数えます。イヌグスともいわれます。 		まつ いわ ぎょうじ 祭りやお祝い行事 まごわた し し まい まい ます だ じんじやし し まい 孫渡し 獅子舞 (ささら舞) 益田神社獅子舞 おおとりじんじやとりまつり て こ さきじんじやおおしおまつり な もの 大鳥神社酉祭 手子后神社大潮祭 鳴り物
	ぐんせいち おおた ち く ウチワサボテン群生地 (太田地区) まいとし かい ぎふ さい ほう 毎年6～8月ごろに黄色く美しい花を咲かせます。100年は経つと推定されています。 		き しよくぶつ 木や植物 し せい ち こうどういん ハマナス自生地 廣幢院のイヌマキ

神栖市の歴史を知ろう！

かい じょうせつてんじしつ
1階 常設展示室



●東国三社と息栖神社
息栖神社は、大同2年(807)に日川から息栖に移ったと伝えられています。江戸時代には、鹿島・香取・息栖をめぐる旅が流行し、多くの人々が訪れました。

●明治い新
明治時代になると藩にかわって県がおかれ、宮谷県、新治県をへて茨城県となります。明治22年(1889)の市制町村制による合併では軽野村、とうしもあら なかしまあら やたべあら わかまつあら 東下村、中島村、矢田部村、若松村の5つとなります。

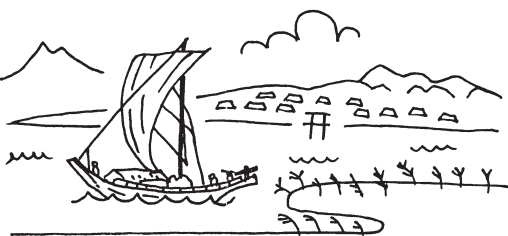
●開たくの歩み
人々は、水害を防ぐために居切堀や利根川の流れをよくする工事を行いました。また、鰐川の三角州を干たくし、水田にしました。

●交通の発達
古くから水上交通が発達し、じょう気船やと船が活やくしていました。また、陸上でも鹿島ー波崎間を乗合バスが走り、便利になりました。

●文化と教育の向上をめざして
明治時代以後、各地区につくられた塾などが青少年の教育にえいきょうをあたえました。奥野谷に生まれた峰間信吉は日本の教育問題に取り組みさまざまな活動をしました。

●戦時下の神栖
市には砂きゅうや広大な土地があったので飛行場などの軍のし設がつくられました。また、このころから物が不足し、人々のくらしは苦しくなりました。

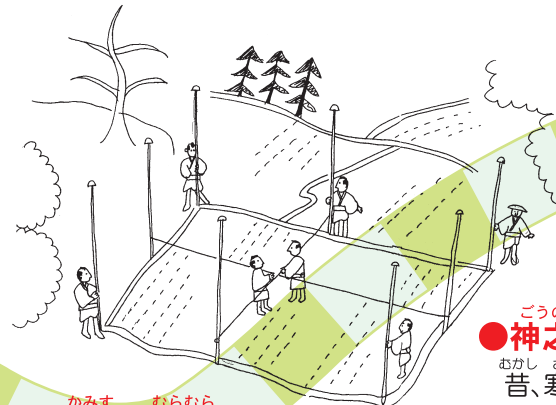
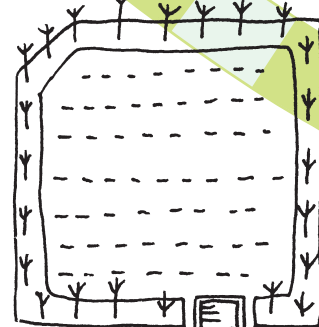
●江戸時代のしゅう運と文化
利根川は江戸への荷物を運ぶ水路として発達しました。川ぞいには河岸ができ、人や物が行きかいにぎわっていました。



●江戸時代の漁業
海や川などでは漁業がさかんでした。とくに、鹿島などでは地引きあみでイワシをとり、肥料にして出荷していました。

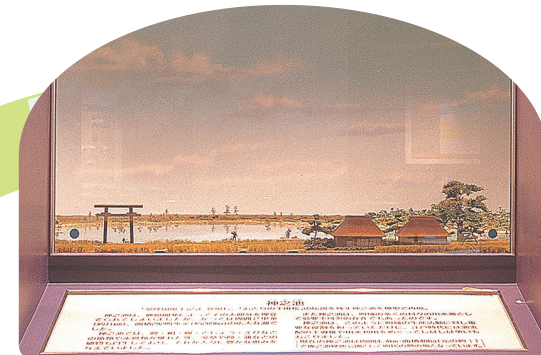


●江戸時代の農業
人々は米をたくさんとるために新しい田を開き、砂きゅうにはほり下げ水田がつくられました。

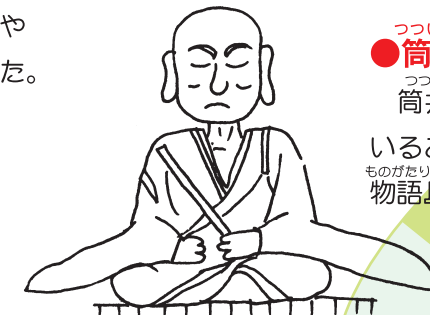


●神栖の村々
江戸時代に行われた検地により市域は19の村に分けられ幕府や旗本の支配する土地となりました。

●神之池
昔、寒田とよばれた池は、千年以上も前から人々に豊かなめぐみをあたえていました。その池も鹿島開発によってうめ立てられ、7分の1の大きさになりました。



●筒井浄妙
筒井地区の出身と伝えられているおぼうさんで、有名な『平家物語』にも登場しています。



●板碑
墓石のようなもので、亡くなった人の供養のためにたてられました。現在、市では5つみつかっています。



●海夫
昔、利根川は海水が霞ヶ浦まで入りこむ大きな入り江でした。岸には津という港がつくれ、海夫とよばれる人たちが漁業や交易をしながら生活していました。

●常陸国風土記
今から約1,300年前につくられました。神之池のことや鹿島の砂鉄で鉄をつくったことなどが書かれています。

市の移りがわりをくらべてみよう！

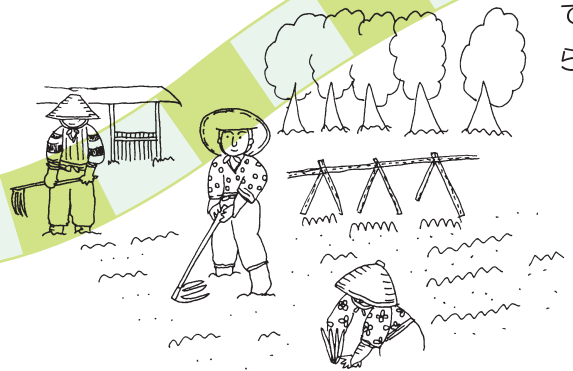


●市を拓く
現代の神栖市の模型です。人々は水の豊かなめぐみを受けながら、水害や水辺の開たくなど水と共存し更なる快適なくらしをめざして発展を続けます。



●水の郷
明治18年頃の神栖市の模型です。海・川と中央には神の池と水に囲まれた市は、昔から水と深く関わりながら発展してきました。

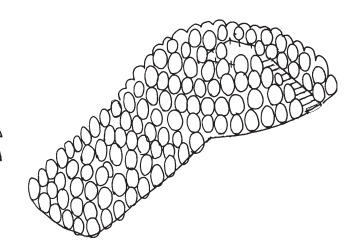
●戦後の復興
戦争が終わり、戦地から帰ってきた人々は、軍用地だった大野原地区や若松地区などの荒地を開たくしました。



●鹿島開発への途
昭和30年(1955)に軽野・息栖村が神栖村になりました。このころにあった自衛隊基地計画は地元の反対にあい、かわって昭和35年(1960)から鹿島開発が進められました。



●未来への遺産
昔の人々が残した文化財を保護・活用し、未来へ引きついでいきましょう。



●神栖市の遺せき
市で一番古い奥野谷貝づかは、縄文時代の遺跡です。また、利根川ぞいでは古ふん時代の家のあとが多く発見されています。

●権現づか古ふん
日川地区に残されている古ふんです。昔、権力のある人が古ふんとよばれる大きな墓をつくりました。

